

カ行イ音便の形態的定着

迫野, 虔徳

<https://doi.org/10.15017/12188>

出版情報 : 語文研究. 31/32, pp.113-124, 1971-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

カ行イ音便の形態的定着

迫野 虔 徳

とり、非音便形は専ら中止法などに使用されるというように、相互に機能の分担がなされるようになった時代。

所謂音便は、もと特殊な連音上の音韻変化現象であったが、四段活用動詞の連用形を規則的・恒常的に襲うようになってそれ自体形態的意味をも持つようになった（サ行を除く）。現代語法における動詞の音便は、まさにこの文法現象としてのそれであるが、音便がこのような質的転換をとげたのは、いつの時代に属するか、という問題については、今日なお十分論議がなされているとは言い難いようである。

四段活用動詞の連用形が「テ」「タ（リ）」などに接するとき、そのあり方によって次の三つの共時態に分けることができるかと思う。

- 1、口頭言語においても、「読みて」「書きて」のごとく発音され、未だ音便の形を知らなかった時代
- 2、「読むで」「書いて」の形が、その非音便形と文法的には等価のものとして併用された時代
- 3、「テ」「タ（リ）」などに接続するときはず音便形を

音便に関する問題としては、従来は主として右の第二の段階が論じられてきたといつてよい。訓点資料などの比較的早い時代の確実な文献の調査研究が進展したことなどもあって、音便の初期の段階の諸問題―音便発生の時期、それを惹起した要因、初期の段階における音便形使用の実態等々―については種々の考察がなされてきた。しかし、第二段階から第三段階への、音便自体の本質的な転換がなされた時期については、あまり言及されていないように思う。

動詞における音便が、音韻現象としての段階から文法現象としてのそれに展開した時期は、莫然と「中世」にあるらしいことは予想されている⁽¹⁾。

そのことは、天草本伊曾保物語などの中世末期の口語資料における音便使用の実態などからもある程度推測できることであり、また、ロドリゲスがその文典で

O Aquele (上げて) の形に関連して注意を要するのは、書きこ

とばに於ける他の二種の活用では *Yomie* (読みて)、*Narite* (習ひて) となる事である。尤も多くの場合、書きことばも話しことばの形の *Yode* (読むで) *Narite* (習うで) をも用ゐるのであるが。(「書きことばの活用」土井忠生訳書 176P) と、むしろ書きことばにおける非音便形の方を、特に注記しなければならなかったことによつてもほぼ推察できることである。しかし、この中世末の状態をどこまで遡らせることができるか、となると問題は甚だ難しい。

第一に、これを音便という名のもとに総括的に論ずることができないことである。同じ四段動詞における音便といつても、連用形の末音節の子音の違いによつて、所謂イ音便・ウ音便・撥音便・促音便の四種に分れるが、それらがその生成・発達段階を同じくしたという保証はない。音便現象が口頭音声の領域で多分に発音上の便宜に基いて発生し展開したものであるとすれば、むしろそれらの間には当然生成、展開上の遅速があつたとみなければならぬ。現に、ハ行四段動詞のウ音便はかなり遅れて発生したらしいふしがあるし、サ行四段活用動詞のごとく、遂に第三の段階に至らず、一時期を境として却つて衰退の一途を辿つたようなものもある。従つて第二段階から第三段階への音便の質的転換は、各音便の一、一について跡付けを試みなければならず、これらを一概に概括的に論ずることはできないのである。

第二に、このように各音便ごとに検討しなければならぬとしても、そのいづれの場合も転換の跡付けを得ることが甚だ困難なことである。文献における表記の面から、当時の口頭語の

世界において音便がどのような位置を占めていたかを推察することは、実際問題として不可能に近い。音便形のみが使用されている文献はまだしも、音便形、非音便形が混用されている文献では、その非音便形が文語的な表記であるのか、実際にそのような形があり得たのか判別の手段はまずないと言つてよい。

湯沢幸吉郎博士が、抄物に見える

カ、ルムツカシキ氣ツマリナル処へ行キタコトハナイソ (中華若木詩抄)

民カソムキタホトニ (古文真宝抄)

大文字ニカキテライタソ (蒙求抄)

のような表記字面を示されて、「これ等は今日のいはゆる文語・口語両体を混合した様な言方であつて、当時果して実際の対話にも用いたか否か、或は記述にのみ現れる言方であるか。軽々に断案を下すべきではないが、とにかく過渡期の言語として興味あり、且つ注意に値するものと思う。」と、慎重にその結論を保留されたのも、その適切な判別の手段が求め難かつたからであらう。もつとも、たとえば、「行キタコトハナイソ」のような表記の見える中華若木詩抄では、カ行四段動詞の連用形がイ音便表記された割合は次のようになっており、

	音便形	非音便形
テ	90%	10%
タ	84%	16%

これを、他の抄物の状態(例えば、漢書抄、論語聞書など)と比べてみると、その非音便形の大半は文語的な表記である可能

性が強そうである。従つてこのようなことから「行キタ」の如キ表記も特殊な記述上の形でしかなかつたのではないかという解釈もできるかもしれない。しかし同時に、例えば橋本四郎氏がこの種の表記について「実際に口頭語で行はれたものかどうか疑はしい点もあるが、室町頃の状態がある程度推測できる」「室町期ごろまでは、なほ非音便形もかなり用ゐられてゐたのではあるまいか。」と述べておられるように、それを積極的に、実際の口頭語にもあり得た形だと解そうとする立場も大いにあり得るし、また、それをあながちに否定することもできないであらう。

このような困難な事情は、他のすべての音便について言えることであり、また、時代を遡るほどその困難さは増して行く。

もちろん、かつての時代の音便状態を知り得るような記録のごときも残されていない。明覚の「悉曇要決」に、

日本ニモキキテヲ云ニキイテト。ヒキテヲ云ニヒイテト。
トキテヲ云ニトイテト。云々

のような記述はあるが、これも当時の非音便形の存在を積極的に否定するようなものではない。

こうしてみると、音便が文法現象として新たな転換を遂げた時期を帰納的に明めることは、まず不可能に近いといつて過言ではなからう。

しかし、一步視点を転じて、音便が文法現象として抗し得ぬ体系的事実となつたとき、そのような事態に素直に対処し得なかつたために異例の変化を余儀なくされた、そのような特殊例を検討することによつて、この問題解明の一つの手がかりをつ

かむことができるのではないかと思う。

叙上のごとく、この問題については今日ほとんど手詰りの状態であることを思えば、敢えてこのような検討を試みることもこの際許されてもよいのではないかと思う。

二

2・1、先述のごとく、音便が単なる音韻変化の段階から、文法現象としての段階に発展した時期は、各音便ごとに個別的に検討されなければならない。ここでは、以下のごときでがかりをもとに、カ行四段動詞のイ音便の場合について考えてみたい。

2・2、現代語で上一段に活用する「いきる(生)」という動詞は、かつては、

限りとして別るる道の悲しきに、生かまほしきは命なりけり
(源氏物語・桐壺)

のごとく四段に活用していた。これは、上代・中古を通じて不変である。しかるにそれが、中世に入ると

たとひ耳鼻こそきれうすとも、命ばかりはなか生きざらん
(徒然草)

のように上二段に活用するようになる。この「生く」という動詞の、四段から上二段に転じた背景に、口頭語におけるカ行四段動詞イ音便現象の著しい盛行が関係していたのではないか、というのがこの稿の主旨である。

2・3 古典語の長い時期を通じて、安定して四段活用を保つてきた「生く」という動詞が、他の多くの四段活用動詞にい

ささかの動揺も見られないのに、この語に限って上二段に転じたについては、そこにそれなりの理由がなければならぬ。

もっとも、「もみつ（紅葉）」のように、上代四段に活用していた動詞が、平安時代には上二段に転じたごとき例があるし、時代は降るが「借りる」「飽きる」「足りる」のように、四段活用から上二段活用に転じたと思われるような類例も他にないわけではない。しかし、これらの四段活用から上二段（上一段）活用に転じたと思われる例が、すべて同一の理由に基いて活用の種類を転じたのであれば、それらがきびぎすを接して相継いで転じてしかるべきである。しかるに、そのような形跡がないのは、それらが全く個別的に、それぞれの事情に基いて活用の種類を転じたと思わなければならない。

これらのうち、すくなくとも上二段活用の「生く」と、上一段活用の「借りる」は、それぞれ相異なる音便現象が、その直接の契機となつて、四段活用から転じたと考えられる。

上一段活用動詞の「借りる」の成立と、「生く」の四段から上二段への転化の背景には、ほとんど同じような理由を措定することができそうである。そこで、すこしく本題からはずれることが、比較の見やすい「借りる」の成立の事情をまず検討して、併せて「生く」の上二段転化の場合の傍証としたい。

2・4 上一段活用の「借りる」の成立と音便現象が密接な関係にあることは、現在方言の状態からも容易に想像のつくことである。

国立国語研究所編『日本言語地図』第二集第71図「かりる（借りる）」の分布図と、第72図「カッテクルを」買つてくる。

の意味で使うか「借りてくる」の意味で使うか」の分布図を比較してみれば、そのことはよく分る。両者の詳細な分布は右図巻に譲るが、第72図に表わされたカッテクルを「買つてくる」の意味で使う地域と、第71図の「借りる」の分布地域はほぼ完全に一致する。主として東部日本に分布している。

それに対して西部日本に分布するカッテクルを「借りてくる」の意味で使う地域、即ち五段活用の「借る」を使用する地域は、「買つてくる」は「買うてくる」とウ音便の形になるのであるから（国語調査委員会「口語法分布図」22図「ハ行四段活用ノ語ノ連用形」）結局現在方言には次のような対応があることになる。

借る（五段） 買うて（ワ行ウ音便）（西日本）

借りる（上一段） 買つて（ワ行促音便）（東日本）

この対応関係は、その緊密な分布対応の姿からして偶然に成立したものとは考えられない。右の対応関係は、次のように言いかえることができる。

借つて 買うて（西日本）

借りて 買つて（東日本）

カッテクルが「借つてくる」「買つてくる」両様の意を含んでいたのでは、実際の言語生活には支障を来すであろう。「借る」「買う」が、同じ形であることよつて生ずる意志伝達のまぎらわしさは、古く遡っても同様であつたに違いない。右の対応は、そのような「同音衝突」を回避しようとした配慮の結果と予想することができよう。

右の対応のうち、西部日本の「借つて 買うて」の形は、そ

れぞれ歴史的に見ても音便の体系の上からは自然な形であつて、「同音衝突」回避のための、ことさらなる配慮の結果とも考えられない。配慮がなされているとすれば、それは東部日本の「借りて 買って」の形に對してである。「買って」の促音の形は、東部日本の他の多くのハ行四段動詞の音便と軌を一にするものであるから、その配慮は、「借りて」の形にあつたと見なければならぬ。この「借りて」の形の成立について、かつて亀井孝氏は、次のように述べられたことがある。

I、「かりて・かりた」の かたちは 「かつて・かつて（買）」の かたちを つかう 方言の 圏外で、うまれ ている、この方言の領域が さいわい それを 借用しえたのでは ないか。

II、「かりて・かりた」の かたちの 成立は 「かつて・かつて（借）」の（音便の） かたちの 成立と せりあ つて ふるいであろう。

簡潔に述べておられるので、その意を誤って解しているのではないかと恐れるが、右記の文面には直ちに承服し難いところがある。

「かりて・かりた（借）」の形は、「かつて・かつて（買）」の形を使う方言の圏外でしか成立し得なかつたようなものではない。初めに述べたように、音便の問題は、三段階に分けて考えなければならぬ。

- 1、未だ音便を知らなかつた時代
- 2、「取りて・取つて」、「切りて・切つて」が文法的に等価のものとして併用された時代

3、「取つて」、「切つて」の形のみが使用されるようになってきた時代

亀井孝氏がIIで述べておられるところの真意はよく理解できないが、「かりて・かりた（り）」の非音便の形そのものの「成立」は決して新しいものではあるまい。右の1の時代には、この非音便の形しか存しなかつたのである。しかして音便の現象が発生し、2の時代に至ると、「取りて」が「取つて」、「切りて」が「切つて」となるものになつて、同じラ行四段に属する「借りて」も「借つて」への音便化の衝動を持ったであろう。

しかるにハ行四段動詞の促音便が行われていた領域では、「買って」との「同音衝突」を生ずる恐れがあり、「借つて」への音便化が阻止されたものと思われる。ラ行四段動詞の音便化は、他の音便より遅れたらしい形跡があるが、仮りにそうではなくハ行四段動詞の音便化と殆んど歩みを同じくしていたとしても、結果としては「買ひて」の「買つて」への音便化に一步を譲り、「借りて」は、その位置にそのままどまつた形となつた。つまり、「借りて」の非音便の形は、「かつて・かつて（買）」の方言領域の圏外で成立したものを借用したようなものではない。その方言領域の「かつて・かつて（買）」の形との兼ね合いのために「かりて（借）」の形にとどまることを余儀なくされたのである。

時と共に音便形多用の傾向を強めていた中で、「かりて（借）」のごとき非音便の形を保ち続けているとどのようなことになるであろうか。

右の2の時代には、「借りて」の非音便のままの形であつて

も、他のラ行四段動詞の一方の許容の形「取りて」「切りて」などと等しなみに見なされて、それ程その形を不自然なものとしてとがめられるようなことはなかったであろう。しかし、3の時代に至って、「取りて」「切りて」の非音便の形が口頭語から消滅してしまつと、ただひとり「かりて(借)」の非音便の形を保持しているのは著しく不自然なものとなつたに違いない。

他のラ行四段動詞がすべて促音便の形で実現されている中で、ひとり「かりて(借)」の形にとどまつている―実は、「買って」との兼ね合いの上、その形を余儀なくされている―うちに、やがて、その連用形が決して音便化することのない「おりて(降)」などとの類推を呼びおこしていったものと思われる。しかして「おりて(降)」の終止形が「おりる」であるごとく、「かりて(借)」の終止形は「かりる」と類推され、ここに新形が成立することとなつたと考えられる。⁽⁸⁾

一方、「買ふ」が「買うて」とウ音便の形で実現されていた領域では、「借る」が「借つて」の形をとつても「同音衝突」の恐れはなかった。そのために「借る」は他のラ行四段動詞と並行して容易に促音便をとることができ、ひいては旧来の活用段を保つことができたものと考えられる。

今日の方言分布が先述のごとく「借る・買うて」「借りる・買って」という緊密な対応分布を示しているのは、以上のよう

な理由に基いているものと思われる。
このように考えれば、四段活用の「借る」から上一段の「借りる」に転化したその直接の契機は、ハ行四段動詞の促音便―

とりわけ「買って」―という音便現象にあつたということができる。

2・5 「生く」という動詞が、四段から上二段に転じた背景にも、これと同じような事情を想定できそうである。「借りる」の成立の場合を傍証としながら、以下に「生く」の活用段転化の背景を考えてみたい。

先述のごとく、今日「生きる」と上一段に活用するこの動詞は、上代・中古を通じて四段に活用してゆるぎないものであつた。

四段に活用する以上、「いきて(生)」の形にも音便化への衝動は当然あつたものと思われる。音便は、当初は仮りに語彙の色あいの強いものであつたとしても、次第に体系的事実としての性格を強めていたことは疑いない。2の時代から3の時代に近付くにつれ、その傾向はますます顕著になつていつたであらう。

しかるに、ハ行四段動詞の促音便が行われていた領域で「借りて」がその音便化を阻止されたように、「生きて」にもそれを阻むものがあつた。「借りて」がその音便化を果せなかったのは、「買って」との兼ね合いのためであつたが、「生きて」の場合は専ら自身の音的構成の不都合さにあつたと思われる。

そのことは、同じくカ行四段動詞であつて、「いく(生)」と音の構成を同じくする「いく(行)」という動詞が、この語に限つて促音便という異質の音便をとることによつても容易に想像される。「いきて(行)」が「いって(行)」という変則的な形ででも、ともかく音便化を実現しようとするそれ程強い

音便化への志向を持ちながら、他のカ行四段動詞に準拠した「いいて・いいた」の形を取って捨て取らなかったところに、その形のもつなみなみならぬ不都合さを感じないわけにはいかない。

橋本四郎氏は、「行きて」が「いいて」の音便の形を避けた理由を次の二つに求められた。

1、「いいて」の形では語幹と語尾とが全く同音となつてけじめがつきにくくなること。特に「行く」のごとき基本語として利用価値の高い語は、独自の語形式を際立たせようとする意識が働くことと思われる。それを「いいて」と音便するとすれば、自ら求めて語幹を曖昧にすることになる。

2、同じく基本語である「言ひて」の口頭音「いいて」と衝突を起す恐れがある。

但し、この2の理由はいささか問題であろう。イ、「いきて(行)」に「いいて」という変則的な音便化を促すほど「言いて」の非音便形が勢力を持ちつづけていたかどうか。ロ、「行く」と「言う」が実際の言語生活において不都合な衝突を起す恐れが、それほど強かつたかどうか。現に東部日本では「言って」「行って」は同形で、そこに衝突回避の跡は見られない等。結局、その主たる理由は1にあると見るべきであらうと思う。その事情は、「いきて(生)」の場合も同じと考える。もちろん言うまでもなく「ゆいて(行)」の形はあつても、「いいて(行)」⁽⁹⁾、「いいて(生)」の音便の形は、文献に一も見出すことができない。それは偶然ではなく、恐らく「いきて(行)」⁽¹⁰⁾、「いきて(生)」の二つの動詞は、他のカ行四段動詞が時と共にイ音便多用の傾向を強めていた口頭語の世界にあつ

て、「いきて」の「いいて」となることの不都合さによって、依然として非音便の形を保ち続けていたものと思われる。

その結果がどのような事態になるかは「借りて」の孤立化にその一つの場合を見てきた。「借りて」がその非音便の形で孤立化することによって上一段への類推を呼び起したように、「いきて(生)」も、カ行四段動詞イ音便化の中で孤立化し、その非音便の形の不自然さが上二段への類推を呼び起していったと思われる。この間のことは、「借りて」の場合に譲つてくり返さない。しかるに、同じ音の構成を持つ「いきて(行)」は、「いいて(行)」という変則的ながらも音便化を果して、「いきて(生)」とその道を異にしたのはなぜか、次にこの点を考えてみよう。

2・6 「いきて(生)」⁽¹¹⁾、「いきて(行)」が相携えて同じ変化を遂げなかつたその最も大きな理由は、両者の四段動詞としての安定度に差があつたためと考えられる。⁽¹⁰⁾

例えば古本説話集における「いく(行)」と「いく(生)」の各活用形の使用例を調べてみると、次のように異つた現れ方を示す。

(A表)

	行く		未然		
行く	9		連用		
生く	0	4	終止		
		1	連体		
		0	已然		
		0	命令		

「いく(行)」は、各活用形いづれも一応その例を見ることができるが、「いく(生)」には、使用される活用形にかたよが見られる。これは古本説話集に限つたことではなく、他の

資料にも同様の傾向を見ることができ。 「いく(生)」の各活用形の使用状態を中古の資料に求めると次のようになる。

(B表)

	竹取物語	伊勢物語	古今集	蜻蛉日記	落窪物語	枕草子	源氏物語	紫式部日記	更級日記	新古今集	計
未然	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
連用	2	3	2	2	7	3	33	1	0	2	55
終止	0	0	0	0	0	0	4	0	0	0	4
連体	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
已然	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
命令	0	0	1	2	5	1	32	1	1	3	46

右に見るように、「いく(生)」の使用例の大半は、連用形と命令形であって、あとは全く使用例を持たないか、あるいは微々たるものでしかない。そのうち、命令形はすべて完了の助動詞「リ」に接したもので、命令法の「いけ(生)」の形は、和泉式部日記に、

君は来ずたまたま見ゆる童をばいけとも

今は言はじとおもふか

とある。「いけ(行)」との掛詞として用いられたものがわずかにそれかとされるぐらいで、ほとんどその例を見ない。未然形・連体形も源氏物語にわずかに各一例を見るだけである。源氏物語

に見えるその未然形の一例も、

限りとて別る道の悲しきに

いかまほしきは命なりけり(桐壺)

というやはり「いく(行)」との掛詞として用いられたものである。

このように連用形・命令形以外はほとんどその使用例を持たないとするれば、この「いく(生)」という動詞は四段活用動詞としては甚だ不完全なものであったといえることができる。カ行四段動詞の非音便形が口頭語においてもはや不自然とみなされるだけの情勢が周囲に醸し出されたとき、「いきて(生)」がむしろあっさりとする古来の四段の座を捨て上二段に転じていったのも、こうした四段活用動詞としては不完全な状態にあったことが幸いしていたと見ることができよう。わずかに、比較的多数の使用例を持つ命令形のみが、「おきて(起)」などの上二段語と同類のごとく類推していくことに抵抗を示し得るに過ぎないが、しかしその命令形すらも既にその類推を妨げ得るほどの力は失いつつあったものと思われる。

先述のように先の(B)表における命令形の計四六例は、すべて完了の助動詞の「リ」に続くもので、しかもその大半は「生ける」という「リ」の連体形に接した形である。使用例のこのような固定化は、命令形の働きの弱さを示すものであろうが、そのほとんど唯一の用法といつてよい完了の助動詞「リ」との接続用法も次第に衰弱しつつあったものと思われる。

完了の助動詞の「リ」は、中古以来、次第に「タリ」に撰せられようとする傾向にあり、従つて「生けり」の命令形十りの

形は、次第に「生きたり」という連用形＋タリの形への傾斜を深めていたと思われるからである。

また、宮地幸一氏が既に指摘されているように、中でも大半の例を占めた「生ける」という「リ」の連体形に続いた形は、「リ」の衰退と共に「生ける」というその形で一語的性格を強め、固定化されていった趣きがある。

このような命令形使用の衰弱と固定化によって、「生く」という動詞は、わずかに連用形のみがひとり十全の機能を發揮し得るだけの心もとなない状態にあつたのである。その連用形の「いきて(生)」の形が、四段動詞としてはもはや不都合とされる程の情勢となつたとき、その音便化しない形を上二段動詞に類推していくのは、むしろ自然な成り行きであつたとさへ言えるであらう。

しかるに、「いく(行)」の場合は、古来からの四段活用の座が固定しきつていた。(A)表にみるように、「いく(行)」は、ともかくその全活用形を整えてまづべんなく使用されている。特に「いく(生)」の場合とは違つて、「いく(行)」には「いけ(行)」の命令法の例を見、それはまた実際のぞんざいな言語生活においては、欠くことのできない重要な形であつたに違いない。また、「いか(行)」の未然形の例も多い。

このように四段活用としての定着度が高いと、「いく(生)」のように身軽に活用段を転化することは、まず不可能である。しかし、かといつて「いきて(行)」の非音便の形であり続けることはできない。音便現象が2から3の時代に変容を始めること、非音便の形は、四段動詞としては次第に不自然なものとな

つてきたのである。もちろんこの際と言えども、「いきて(行)」の非音便の形を他の力行四段動詞の例にならつて「いいて(行)」とすることはできない。音便という新たに生じた音韻現象が形態の領域にまで関与するような情勢となつて、「いく(行)」という動詞は、「いいて(行)」という音便化はできない、四段の位置を捨てて他の活用段を選ぶことは不可能、かといつてこのまま「いきて(行)」の非音便の形であり続けることはできない、という深刻な自己矛盾に陥入つてしまつたと言える。基本語として日常の言語生活に大きな比重を持つている「いく(行)」のような語が、このような不安定な状態でいつまでも放置されたままであるわけにはいかない。この深刻な事態を解決するために、いわば窮余の一策として選ばれたのが、促音便という変則的な音便化であつたと見る事ができよう。

三

「いく(生)」が四段から上二段に転化し、「いく(行)」がただ一語変則的な促音便をとることを、以上のように力行四段動詞のイ音便現象と関連づけて捉えることができると思へば、そこから逆に、それらをそこまで追いつめていた当時の音便状態を知る手がかりとすることができよう。

「いく(行)」が「いいて(いて)」となつた時期についてはいま十分調査が及ばない。訓点資料あるいは訓読調の強い資料には「ゆく」の形であられ、「いく」の形は見出し難いなど資料的制約が大きい。従つてこの点からの推測は将来に残して、いまは「いく(生)」の上二段転化の面からある程度を目

安をたて、おくにとどめておきたい。

「いく(生)」が四段から上二段に転じていった時期については、既に宮地幸一氏が詳細な調査がある。⁽¹²⁾

その早い例には、たとえば次のようなものがある。

○父討れぬと聞けば、たとえば次のようなものである。
きんと歎くこそ無下なれ。(平治物語)

○又いきんとや思召す 又死んとや思召す。(長門本平家物語)

○それも生くるは少く 死者は多くぞありける。(右同)

○わずかにかひなき命ばかりは生くれども国々の民百姓となりて所々にかくれ居たり。(右同)

○此の里の人々疾く逃げ退きて命を生きよ。(宇治拾遺物語)

○身ばかりは命も生きよと内々に申したらんからに(愚管抄)

「いく(生)」の上二段活用の明らかな例は、だいたい鎌倉時代ごろから散見するようで、それ以前のは旧来の四段活用と見なすべきものばかりである。

先述のように、「いきて(生)」という非音便の形が四段動詞としては不自然な状態となつて、その音便しない形が上二段への類推を呼んだとすれば、そのような非音便の形を不自然とするだけの力行イ音便の質的な転換がこの鎌倉時代頃になされたと予測することができよう。「いく(生)」という動詞は、鎌倉時代頃を境として四段から一転してすべて上二段になつたわけではもちろんない。明らかに四段活用と認むべきものもそれ以後にすくなく、その伝統の強さを思はずにはいられない。もし「書きて・書きた」「着きて・着きた」などの非音便の形が、鎌倉時代以降も口頭語になお普通にあり得たのであれ

ば、「生く」も「生きて」の形で、その伝統的な四段活用の座を守つていたことであろう。「生く」という動詞は、鎌倉時代以前には日増しにイ音便化の現象が勢力を増していた中でなお四段活用としての働きを保ち続けていたのである。それが何故、鎌倉時代頃に至つてはじめて上二段への類推を呼び起したのか、ということとはやはり注意しておかなければならないことである。二つの事象の間に強い同類意識が生ずることによつて「類推」は起る。「いきて(生)」のその形が、上二段の「おきて(起)」などとの間に同類意識を生ずるようになったというのは、即ち周囲のイ音便化の情勢の中で「いきて(生)」のその形が孤立化していたことを意味することに他ならない。

音便が音韻現象としての位置から文法現象の段階に進展した時期はもちろん一線をもちて画せるようなものではない。その変化は徐々に進行していったことであろうし、個人的にも遅速があつたであろう。また、この問題にとつて詳密な時期の比定がそれほど重要であるとも思えない。

ただ力行イ音便の性格の変化がおよそ鎌倉時代前後に起つたらしいという推定にとどめておくことでこの際十分であろうと思ふ。

このような音便の問題を通して、古典語から近代語への脱皮をやはり鎌倉時代というこの時代に見ることに深い興味を覚える。しかし、ことはわずか力行のイ音便一つに限ることである。厳密には力行のイ音便についても保証しかねることであるが、ただ、その最も初期の段階から見え以後もごくありふれた音便現象であるこの力行イ音便のおよそのその性格転換の時期

を知ることによって、他の音便にもある程度の目安を与えることはできるのではないかと思う。

注

1、土井忠生「近古の国語」『国語科学講座』第四卷63 P

「イ音便」中古に於けるイ音便はカ行サ行に早くあらはれ、近古に入っても、この両行のイ音便が最も勢力を得た。ガ行のイ音便は、中古にも存したが極めて稀であつて、鎌倉時代にも尚多くはない。室町時代になって、カ行サ行及びガ行の四段活用動詞の連用形は話言葉に於て「い」の語尾をとるのが本體となつた。」

浜田敦「中世の文法」『日本文法講座3文法史』206 P

「動詞の場合、主として四段形式のものの連用形に見られる「音便」については、その始まつた時期は一応前代にあると言われるけれども、それが一般的になり、したがつて単なる音韻現象ではなく、むしろ文法的、形態的なものとなつたのは、やはり中世にあると言つてよい。

(中略)もつとも、「行きた」などという現代語ではあり得ない形が、まだ中世末期ないし近世初期頃までの文献に決して珍しくはないけれども、しかしそれも言わば特殊な表現に属するもので、やはり普通には「行つた」とか「行いた」が話しことばとしては正規の形だったのである。」

2、築島裕「平安時代語新論」459 P

3、湯沢幸吉郎「室町時代言語の研究」108 P

4、「行キタ」は本抄の仮名書き例から「ユキタ」である蓋然性が大。

「漢書抄」「論語聞書」のイ音便表記の実態は、出雲朝子「抄物におけるラ行四段動詞の音便形について」『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』499 P 513 P

5、橋本四郎「行く」の音便」女子大国文12

6、亀井孝「口語の慣用の微証につき その発掘と評価」国語学76

7、出雲朝子「抄物におけるラ行四段動詞の音便形について」『佐伯梅友博士古稀記念国語学論集』

「各種の抄物の調査から言えることは、室町時代の口頭語においては、ラ行四段活用動詞連用形の促音便化はなお進行の過程にあり、応仁以前においては、特殊な場合を除いては、むしろ原形の方が、どちらか、という場合に選択される、いわば標準的な言いかただったのである」ということである。」528 P

「ラ行以外の動詞の音便形はすでに固定化していて、ラ行の場合のようには流動的でなかつたということが考えられる。」527 P

8、恐らく「借り・借るる・借るれ」の上二段の形をとることなく、ただちに上二段「借りる」を成立させたものと思われる。それを可能にしたのは、その地方の一段化の進展が早かつたからであると考ええる。「借りる」の成立過程については、具体的な資料に拠つて別に詳述したい。

9、橋本四郎「行く」の音便」女子大国文12

10、その他、両者の口頭語における使用頻度の差、アクセントの違いなど考えられるが、それらが関係したかどうかは分らない。いづれにしてもこれらは大きな理由ではなかつたろう。

11、宮地幸一「動詞漸移相の研究(一)」国語研究4

12、右同。

13、この時代に、「生く」という動詞の四段らしさを示していた「生け+り」という命令形の決定的な衰滅があつて、上二段への類推が果されたのではないかという考え方があられるかもしれない。しかし、連用形

以外の活用形を持たなかったとは考えがたい「借る」が、連用形の「かりて」の形の不都合の故に活用段を転化したように、この種の変化には口頭語において大きな比重をもつ連用形の事情が大きく作用するものと考えられる。

「行(い)く」の「いって(いて)」の促音便は、史記抄などに既に見ることができ、それより一時代前に成立していたことは充分考えられる。文献の徴証に期待すること大。